

常照

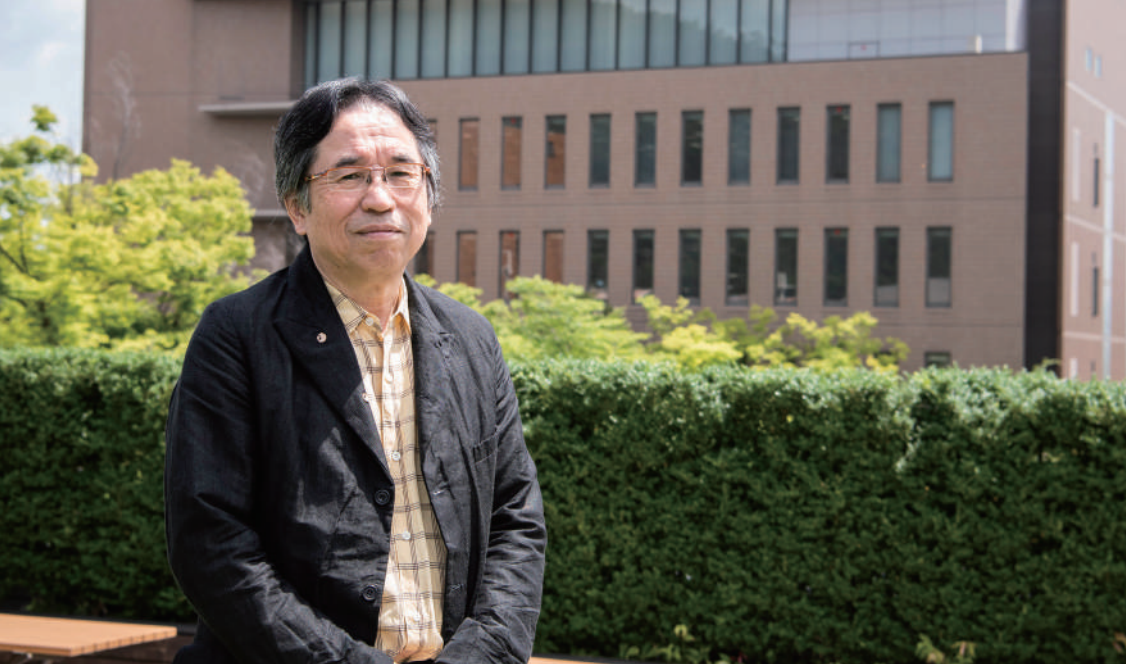
佛教大学附属図書館報

2019

NO. 66



佛教大学附属図書館



獣や鳥たちも、森の木々たちも

附属図書館長・仏教学部教授

松田 和信

痩せ細ったシッダールタは、沐浴を終え、ナイランジャラー川の岸からそろりと出た。「彼に対する」敬愛の心によって、斜面の木々は枝の先を垂らして手を貸した。

仏教詩人アシュヴァゴーシャ（漢訳では馬鳴^{めあやう}という）がサンスクリット語で書いた一節である。紀元二世紀の北インドで活躍したアシュヴァゴーシャは、千ほどの美しい詩によってブッダの生涯を綴った。ブッダの生涯は仏教経典の中に断片的に説かれているが、誕生から死までを一つの作品として綴ったのは彼が初めてであった。

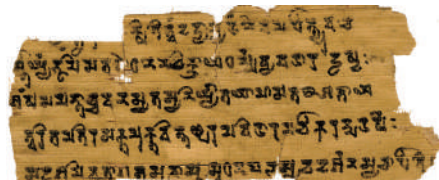
二十九歳の時に家を捨て、ブッダとなるべく遍歴の修行者となったシッダールタは、瞑想による修行、さらにガンジス河の支流のほとり、苦行の森といわれる岸辺で、肉体を痛めつけて神秘体験を求める修行に六年を費やした。しかし、いくらやつても何も得られない。死の淵を彷徨ったシッダールタは苦行をやめて川に入り、対岸に上がる。この時、斜面の木々も彼に手を貸したのである。土手の上には数本の木が育てていた。後に菩提樹と呼ばれるアシュヴァタ樹の下に座り、彼は思いを巡らせてゆく。一体、人間存在の苦しみはどこから来るのかと。アシュヴァゴーシャは、この詩で続ける。

「なすべき事をなし終わらない限り、大地の上でこの姿勢を崩さない」と「決意した」彼は、眠った蛇がとぐるを巻くような、不動にして最上の結跏趺坐の姿勢を取った。

意を決した聖者（シッダールタ）が座にある間、神々は比べるものもない喜びに到り、獣や鳥たちは鳴き声を上げず、森の木々たちは風に吹かれても音を出さなかった。

韻を踏んだ原文の雰囲気まで日本語に置き換えるのは難しいが、この世の命ある存在のすべて、神々はおろか、獣や鳥たちも、さらに木々たちでさえ、じつと声を潜めてシッダールタのさとの瞬間を待つのである。やがて、彼の心の中に、瞑想や苦行によってではなく、すべての疑問が論理と理性によつて、ひいては人間の言葉によつて解決できるとする、インドの伝統を木々端微塵に破壊する驚くべき反インド思想が芽生えてゆく。

多くの研究者の例に漏れず、研究を始めた頃は、私も仏教哲学の難しい書物ばかりに目が行っていた。しかし、歳を取ったせいだとはあまり言われたくないが、今はこのような作品に強く心引かれる。私は特に信仰を持つ者ではないが、古代の仏教者たちがブッダに寄せた想いに共感できる感にやつとなりつつあるのかもしれない。サンスクリット語原文でブッダの生涯を読むことは今の私にとって最高の喜びである。



アシュヴァゴーシャによるブッダ伝の貝葉写本断簡
アフガニスタン・パルミヤン渓谷出土（5世紀）



2019 NO. 66

目次

獣や鳥たちも、森の木々たちも

附属図書館長・仏教学部教授 松田 和信

1

Interview

変動する社会と教育との関連を探る

教育学部教育学科教授 原 清治

2

二代目市川左團次と知恩院山門前野外劇 ― 図書館の視聴覚資料 ―

歴史学部歴史文化学科教授 斉藤 利彦

6

私の研究方法

仏教学部仏教学科教授 田山 令史

10

所蔵資料紹介

緑心寺日鑑・御法事記録

図書館専門職員 尾下 仁美

14

「佛教大学図書館デジタルコレクション」のこれまでとこれから

図書館専門員 飯野 勝則

20

佛教大学附属図書館の事業活動報告(2018～2019年度前半期)

24

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

25

変動する社会と教育との関連を探る

教育学部教育学科教授 原清治

2019年4月から副学長ならびに研究推進機構長になられた教育学部の原清治教授に、書との出会いや現在の研究内容、研究推進に対する抱負などについて話を伺いました。



これまでに出会った本の中で最も記憶に残る一冊をご紹介します。

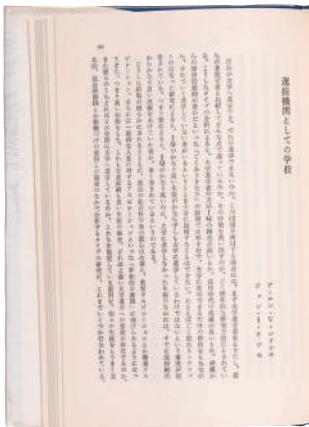
カラベル (J. Karabel) とハルゼー (A.H. Halsey) が編纂した『教育と社会変動』(上下巻・東京大学出版会・1980年刊)です。大学院に入って指導を受けた先生から一番最初にご紹介いただきました。社会の変動が教育の変化を惹起する、という観点から編纂された本です。

たとえば、情報化という大きな社会変動は、学校現場にタブレット端末や電子黒板の導入をもたらしました。情報化の加速は、子どもたちの間にもスマートフォンを促進させ、所有率の高まりは子どもたちの人間関係にも大きな変化をもたらしています。社会の大きな構造的変化が学校現場

を変え、子どもたちにも多大な影響を与えている……現代の社会に当てはめて言えば、そういった内容の本になります。

多彩な側面から教育問題を掘り下げる欧米のすぐれた論文が上下2巻に分けて収録され、研究の枠組みを多面的に提示していることから、「教育社会学のパラダイム展開」という副題がつけられています。

僕がとりわけ面白いと思ったのは、「選抜機関としての学校」という学説です。学校は何のためにあるの?と聞かれれば、多くの人は、子どもたちを人間的に成長させる場、あるいは自立や自己実現を支援する場、といった答え方をするのではないでしょうか。



ところが、この学説では、学校には学力に応じて子どもたちを社会の各階層に分配していく機能もあると論及しています。学校といえ、子どもたちを大人にしてい

場所、社会化する場所、自己実現するための知恵や技能を授ける場所といったように、プラスの側面が強調されることが多く、実際そのとおりなんです。一方で非常にクールで残酷な側面をもっていて、子どもたちを試験によって序列化し、それにしがたって進学先の選定やクーリングアウト(やる気の冷却化)をする機能を備えているということを述べています。そしてその進学先は社会の階層と対になっている。学校のハイアラーキー(階層構造)と社会のハイアラーキーは、基本的に横に連動しているというわけです。

大学院に入ったばかりの頃は、指導のスキルをどう高めていくかを研究するのが教育学という認識でした。学問に対する視野がまだまだ狭かったんですね。物事には多様な面があつて、学校についてもプラスの側面ばかり見ていると、ネガティブな側面を見落とす可能性があります。そんなことを強烈に気づかせてくれた一冊でした。この本に出合っていなかったら、多面的なものの見方というところに辿り着くのに、時間がかかったかもしれません。

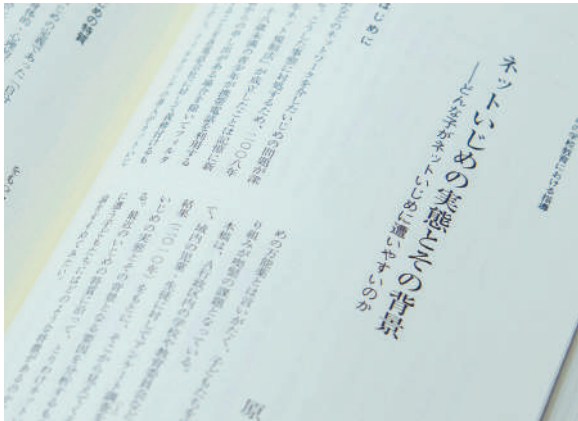
線を引いたり付箋を貼ったりしながら何度も繰り返し読んできたので、ぼろぼろになつてしまい、いま研究室にあるのは3セット目か4セット目。図書館にも収蔵されています。教育学を学んでいる人にお薦めの本です。



現在どのような研究をされているのでしょうか?

学校で起こるさまざまな問題とそのメカニズムを中心に研究しています。いくつもの研究を並行して進めています。最近

「いじめ」の問題、とりわけ「ネットいじめ」の実態やその対策に関する研究に力を入れています。この研究では京都と滋賀の高校生6万8千人を対象に大規模なアンケート調査を実施し、収集したデータに基づく実証的な研究を行っています。



「不登校」の問題も重要な研究テーマです。年間通算30日以上欠席が文部科学省による不登校の定義で、全国に14万4千人いるとされますが、「フチ不登校」と呼ばれる不登校予備軍も含めて研究しています。

もう一つ、「学力低下」の問題も研究しています。学力の問題は、僕の研究の原点です。子どもたちの学力がどのような要因で不振

誰にも干渉されることがなく、いじめつ子ややんちゃ系の子も来ない場所だからです。

学校のトイレにこもって食事をする「便所飯」や、大学の食堂に一人用に仕切られた「ぼっち席」が増えている背景には、友人関係をつくるのが苦手だったり、学校に行くのがしんどいと感じている子たちの居場所として機能している側面もあります。

いじめの問題で苦しんでいる子がいる。学校に行きたくても行けない子がいる。一生懸命勉強しているのに学力が保障されない子がいる。スクールカースト（クラス内のステイタス）の下位にいることを悩んでいる子がいる……子どもたちの問題は、挙げればきりがありません。

学校臨床教育学は、実践科学です。学校が安心・安全で楽しい場所になれないのはなぜなのか、どういう要素を取り除いていけばなるのかを実証的に研究し、少しでも子どもたちの役に立つような提言・提案・データを学校現場にフィードバックしていかなくてはいいけない。そんな思いが強くなります。

副学長になって研究推進を担われました。抱負をお聞かせください。

副学長という立場になり、研究推進機構長として先生方の研究活動の支援を行い、科学研究費助成事業（以下、科研費）をは

になるのかを研究していたときに、いまメインで行っているいじめの問題に行き着き、並行して研究するようになりました。

いじめも不登校も学力低下も、友人関係や対人関係が大きく影響しています。学校病理の問題は、すべて一本の線につながっているのです。最近のこうした研究は、学校を臨床の場として教育学的に研究することから、「学校臨床教育学」という言葉を使っています。

いま行っている研究の最終目標は何でしょうか？

「子どもたちにとって安心・安全な学校づくり」が、僕が行っているすべての研究の最終目標です。

いじめの問題が10年ほど前からふたたび社会問題化し、不登校率も増加を続けています。そしてそれに呼応するかのようにな中、高校生を中心に「マスク」の文化が広がってきました。

不登校予備軍の調査で学校現場に行つてマスクをしている子たちにマスクをする理由を聞くと、「安心できるから」という答えが多く返ってきます。今の子どもたちは、学校でのリアルな人間関係のほかに、ネット上での人間関係にも気を配っています。

ちよつとした出来事がまたたく間にSNSで拡散される時代です。表情を読み取られ

じめとする研究資金の獲得や社会への情報発信を推進していくことになりました。

研究には、中長期的なビジョンが必要です。僕の場合は、同時並行で何本も研究を行っています。その二本一本を連携させながらどのように発展させて「子どもたちにとって安心・安全な学校づくり」というビジョンに到達させるかの長期プランを立てて研究を進めています。教員にとって一番大事なのは「情熱」だと僕は思っています。子どもたちの役に立つ研究、日本の教育を変えていく力になる研究を、情熱をもって計画的に進めていく。それが自分自身に課したオブリゲーションであり、科研費を毎年獲得できている一番大きなポイントだと思っています。

佛教大学がいま抱えている課題の一つは、教職員相互の情報交換や情報共有です。科研費の獲得に関しても、各教員はノウハウをもっているけれども、それが大学全体として共有されていない感があります。また、地域連携も研究推進機構のセクションの一つですが、職員の人たちについても、一人ひとりのポテンシャルや大学愛を佛教大学のこれからの取り組みにより反映させていくように、「原」という人間の持ち味を生かし、僕自身を「潤滑油」として機能させて、有効な情報をみんなで共有しながら、佛教大学らしい共生の精神に満ちた楽しい職場にしていければいいと思っています。



原 清治

教育学部教育学科教授
副学長、研究推進機構長

ず、他者との関係性に壁を作ってくれるマスクは、自分を守るアイテムとしてすごく便利なんです。ところが、導人が進んでいるアクティブラーニング型の学習では、意見を言わなくてはいいけない。自分を表に出したくない子は、意見を交換しあう授業が苦手です。マスクをしている子に外圧をかけるような授業になっているのではないのでしょうか。

いじめられている子、あるいは「いじめられ感」のある子は、保健室や用務員室が逃げ場所になっていましたが、最近では「図書館」に避難する子が増えました。居場所に適した一人用のブースや個室があり、

最後に図書館の利用法についてアドバイスをお願いします。

佛教大学の図書館は、センスの良さを感じる、とても使い勝手のいい図書館だと思いますね。教員と連携した質の高い蔵書構築がなされ、常に利用者の立場に立つて利便性の向上が図られています。デジタルのコンテンツも充実し、データベース活用の検索システムもよく整備されています。書庫には全国の主要な大学の研究紀要が並び、研究のヒントになる情報が山のようにあります。

僕も若い頃は書庫によく行っていました。どこの大学のどんな先生がどんな研究をしているのかを常にチェックし、研究に対する発想力を養い、研究者としてのネットワーク拡大にも役立ててきました。科研費を獲得し続けてこられたのも、書庫のおかげかもしれません。

図書館を有効活用してもらえるように、僕は毎年、学部の新入生、大学院生、ゼミ生などを図書館に連れて行つてガイダンスを行っています。図書館は、宝の山です。時間を費沢に使える場所です。ネットで閲覧できない本がたくさんあり、論文をいくつも同時に並べて読み比べすることもできます。支払った授業料分は、しつかり活用してほしいと思いますね。（笑）



長野県生まれ。神戸大学大学院博士後期課程修了。学術博士（神戸大学）。

専門は教育社会学、学校臨床教育学、教員養成。

関西教育学会副会長、日本教育社会学会理事、日本教師教育学会理事、日本教育実践学会理事。主な著書に、『新しい教職教育講座教職教育編 特別活動』（2018年、ミネルヴァ書房）、『特別活動と生徒指導』（2017年、協同出版）、『学修支援と高等教育の質保証Ⅱ』（2016年、学文社）、『ネットいじめはなぜ「痛い」のか』（2011年、ミネルヴァ書房）、『論集 日本の学力問題（上）（下）』（2010年、日本図書センター）、『若年就労問題と学力の比較教育社会学』佛教大学研究叢書7（2009年、ミネルヴァ書房）、『学力問題・ゆとり教育』（2006年、日本図書センター）など多数。

二代目市川左團次と知恩院山門前野外劇

—図書館の視聴覚資料—

歴史学部歴史文化学科教授 齊藤 利彦

図書館デジタル資料 『浄土教報』と演劇記事

私は上方歌舞伎について、興行をキーワードに、その歴史的研究を行っている。ここしばらくは、近代歌舞伎と宗教教団との関係についても調査しており、その関わりから、本学附属図書館のデジタル資料『浄土教報』をたびたび検索している。

近年、近代歌舞伎・演劇研究では演劇雑誌類の研究が盛んで、『演芸画報』や『幕間』など、専門雑誌類の編集方針・傾向、主宰者・編集者、掲載の芸談・芸論などが考察され、これまでにない知見の発見が相次いでいる。

私はこのような研究動向に接し、では、宗教教団が発行している雑誌類には、どのような演劇関係記事が所載されているのか、という素朴な問題関心をもち、同資料を検索しはじめたのだが、意外にも数多くの演劇記事と出会い、うれしさを隠せなかった。

ただ、同誌は演劇専門雑誌ではないため、内容や情報、情報量は断片的であり、体系的に位置づけることはむずかしい。

一方で、専門誌には記載されない、あるいは記されにくい内容もあつて、従来の見解を補える点も多く、こ



写真①
『逍遙選集』第9巻。逍遙の児童演劇・ページェント理論や、大村弘毅による「ページェント上演略記」と題する「熱海町の為のページェント」上演顛末が所収されている。本学図書館所蔵 918.6/84/9。

が強み、と考えている。

そこで、『浄土教報』掲載の演劇記事について、とくに、大正期の野外劇関連のものをいくつか紹介し、若干の考察を加えてみたい。

坪内逍遙とページェント劇

日本近代演劇の巨星といえ、坪内逍遙である。わが国の演劇近代化に果たした役割はとても大きい。その逍遙が大正十年代に推進したのがページェント劇、すなわち、野外劇であつた。

わが国でページェントが知られ始めたのは、大正九年（一九二〇）に開催された世界日曜学校だが、この時期、逍遙は文化事業研究会の〈国民演芸部〉門を核に、市民を動員した演劇・音楽・舞踊の総合芸術に邁進していた。その試作が『熱海町の為のページェント』（写真①）で、同十年（一九二一）十月二日、戸山陸軍学校校庭において試演された。

さて、「野外劇」というキーワードを用いて『浄土教報』を検索すると、坪内逍遙関係では、つぎの三件がヒットする（写真②）。

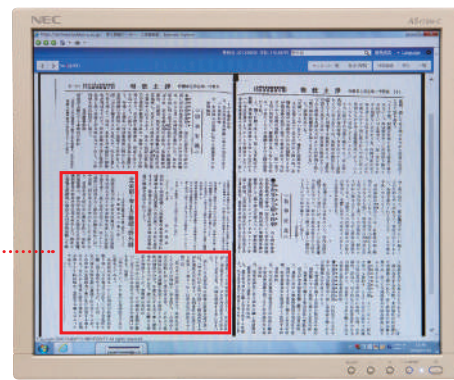
- ①大正十一年六月二十三日付「増上寺を背景とした東京市の野外劇」
- ②同年七月七日付「芝公園で増上寺縁起の野外劇」
- ③同年八月十八日付「増上寺野外劇と活動写真」

いずれも、増上寺を会場とする野外劇開催に関する記事である。それぞれの内容を確認してみよう。

大正十一年七月増上寺 野外劇と坪内逍遙

六月二十三日付記事は東京市主催の野外劇の第二回目を、増上寺で開催することが決定した、というもので、詳細を伝える記事が七月七日に掲載されている。

その内容は、東京市社会局が「民衆娯楽の普通向上」のため、七月十五日・十六日両日、増上寺で野外劇を行なうこと、同寺の八百谷順応氏が筋書を書くこと、同月一日、八百谷氏は「増上寺に成る迄」「黒本尊の縁起」「御竹大日」「祐天上人」の四篇の筋書を脱稿し、同市社会局は坪内逍遙に脚本を委嘱、現在、執筆中であること、脚本は増上寺が譲渡をうけて出版する予定であること、などである（写真③）。



写真③
『浄土教報』大正十一年七月七日付記事「芝公園で増上寺縁起の野外劇」。本学図書館所蔵。

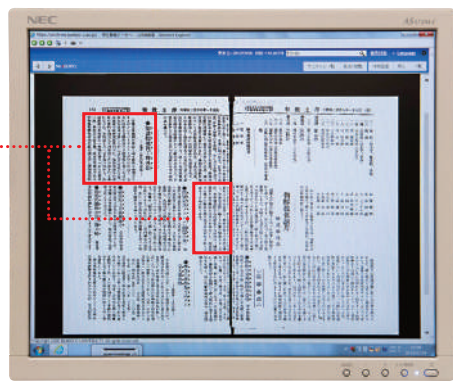
八月十八日付記事は、映像撮影された「黒本尊と家康公」「お竹大日如来」の二篇が、同社会局によって市内各所の縁日で上映され好評、と伝えられている。

これらの内容は管見のかぎり、坪内逍遙のページェント劇では言及されていないため、彼の事蹟を補完するものといえよう。

ところで、『浄土教報』にはもう一件、「野外劇」に関する記事が存在す

知恩院山門前の大野外劇と 二代目市川左團次

大正十一年九月二十二日の『浄土教報』に、「知恩院境内で野外劇―左團次一派が研究的試演―」という見出しの記事が掲載される（写真④）。



写真④
『浄土教報』大正十一年九月二十二日付記事「知恩院境内で野外劇―左團次一派が研究的試演―」。本学図書館所蔵。

写真⑥

二代目市川左團次『左團次芸談』（南光社、1936年）斉藤所蔵。

なお、『日本人の自伝』第20巻（平凡社 1981年）は、同書「自伝」のみを抜き出し「二世市川左團次「左團次自伝」」と題して所収している。本学図書館所蔵 281.08/5/20。



查において、人口十万都市は、たとえば、札幌市十万二五八〇人、新潟市九万二三〇〇人、福岡市九万五三八一入である（以下より）。これらの都市の総人口に匹敵する人々が、左團次

のできない人たちに、出来るだけ安価なお芝居をみてもらいたい、つまり「劇芸術の民衆化」をはかりたい、という考えをもち、一方、松竹は興行の「社会奉仕」を企図していた。

両者の思惑が合致し、左團次四年ぶりの南座出演にあわせ、松竹発祥の地京都で、十月二日、野外劇上演が決まり、会場は二万人以上の観客動員を見込みたため、知恩院山門前が選ばれた。本番に先立つ九月二十九日、南座において、松竹を主催として

左團次は日頃、歌舞伎を観ることのできない人たちに、出来るだけ安価なお芝居をみてもらいたい、つまり「劇芸術の民衆化」をはかりたい、という考えをもち、一方、松竹は興行の「社会奉仕」を企図していた。

同年十月一日午後三時から、知恩院山門前において、二代目左團次による野外劇が上演されること、本興行は松竹主催、後援に京都市社会課、知恩院は「大に此の挙を賛し積極的援助」をするが、上演内容は「宗教的なもの」を求めたこと、左團次側もさまざまな検討した結果、知恩院二十八代洪誉上人時代、織田信長と足利義昭との争いを中心に「知恩院との種々の関係を描きだす脚本」に決したこと、などを伝えている。

野外劇『郷土史劇 織田信長』上演と十万人の観客

「郷土史劇講演会」が開催されている。聴衆千五百名を前に、小山内薫や松居松葉、渡邊霞亭などが、今回の野外劇の主旨や意義を講じる、といった手の込みようであった。

当日の演目は『郷土史劇 織田信長』。知恩院側が求めた内容で、全五幕、入場料は無料。演出・総指揮小山内薫、脚本松居松葉、衣裳考証久保田米斎、信長に左團次、木下藤吉郎が六代目市川寿美蔵、明智光秀は三代目阪東寿三郎、二代目中村芝鶴の足利義昭、洪誉上人には左團次一門の二代目市川左升、といった左團次劇団の面々。

加えて、左團次と親交の深かった祇園の女将で井上流の名手松本佐多の協力により、祇園の少女が稚児姿で参加、松竹シネマは多数の鎧武者のエキストラを手配するなど、出演者は総勢二百名にのぼり、楽屋は方々に五つ、電話回線をつないで連絡しあった。

左團次の親友で、本興行の顧問的存在である永井荷風も観劇のため、同月二十八日から来京している。荷風は当日の上演について、「観客数萬

の『革新興行』を観劇したことになる。実際に十万人も押し寄せたかは判然としないが、この野外劇がいかに空前絶後であったかはうかがえよう。

左團次自身「この有難い人気」が興行「失敗の原因」になった。しかし「私の信長が山門の上に立つて、十万人の人々を控え、京の町を霞の果てまでも見渡して、台詞を云っている時は、まことに、正直なところ、私一代忘れぬ快さのきわみ」（『左團次芸談』南光社、一九三六年写真⑥）だった、と述懐している。役者冥利に尽きる、といったところだろうか。

この野外劇は大正歌舞伎や二代目左團次、彼と親交の深かった永井荷風を語るときに言及されることが多いが、知恩院側の要求などは指摘されていない。『浄土教報』の記事は、日本近代最大の野外劇の実像を補足するものといえよう。

可能性としての『浄土教報』と演劇記事

『浄土教報』に掲載された野外劇関係記事は、予告か事後報告のいずれかであり、当日のありさまは伝えていない。したがって、冒頭で述べたように、内容は断片的であることは否めな

人に及」び、「演技は雑沓のため中止の已むなきに至らむとせしが、辛うじて定刻に終った」と『断腸亭日乗』同年十月一日条に書きとめている（岩波版『荷風全集』第十九巻、岩波書店、一九六四年）。

左團次たちは一万五千人くらいの観客が集まるのでは、と算段していた。ところが、警察の計算で十万人は押し



いが、これまで論じられていない、あるいは知られていないことも含んでおり、その意味では、学界に貢献するものといえる。

これらの記事は、同資料がデジタル化されているからこそ発見できたもので、膨大な量の『浄土教報』をデジタル化した本学と附属図書館の学恩に感謝したい。

今回、紙幅の関係から、六代目尾上菊五郎幻の宗祖劇、文楽座炎上と法然上人人形的首（かしら）、お伽団による児童演劇、十六ミリフィルム映像の上映と伝道などの記事は紹介できなかった。

将来、これらの課題について、本資料を用いて考察し、同資料デジタル化の学恩に伝えていきたい。

寄せたといい、招待客の一部が入場できない、舞台となっている石段に観客があがりだす、演出の本物の馬が楽屋から脱走するなど、相当な混乱が生じ、途中、約三十分中断、一時は上演切り上げも考慮されるほどであった、という。

利倉幸一『市川左團次覚書』や堂本寒星『南座』の掲載図版をみると、確かに、山門前は立錐の余地もない光景であつて、驚くほかない（写真⑤）。



写真⑤
利倉幸一『市川左團次覚書』（建設社 1940年 216頁）。斉藤所蔵。

堂本寒星『南座』（文藝書院 1929年 288頁）。斉藤所蔵。

試みに、大正九年第一回国勢調査で京都市の人口を確認すると、五十九万一千三十三人。単純に考えると、京都市民の約六分の一が知恩院山門前に押し寄せたことになる。同調

さいとう としひこ
斉藤 利彦
歴史学部歴史文化学科教授
学生支援推進室長

佛敎大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。佛敎大学アジア宗教文化情報研究所（現、宗教文化ミュージアム）ポストドクター、佛敎大学宗教文化ミュージアム学芸員を経て、2012年、歴史学部着任。専門は日本芸能史。博士（文学）。主な著書・論文に『近世上方歌舞伎と堺』（単著・思文閣出版、2012年）、『近世世と歌舞伎』（単著・大阪公立大学共同出版会、2008年）、『京都を学ぶ 丹波編』（共著、ナカニシヤ出版、2018年）、『中近世の被差別民像 非人・河原者・散所』（共著・（公財）世界人権問題研究センター、2018年）、『職能民へのまなざし』（共著・（公財）世界人権問題研究センター、2015年）、『京の歳時記今むかし』（共著・平凡社、2006年）、『日本芸能の環境』（共著・京都造形芸術大学、2004年）など。



私の研究方法

仏教学部仏教学科教授 田山令史

「もし、最初に創造された物が人の手だと思つてみると、それは必ず右手か左手である」。私の仕事は哲学で、とくにカントをよく読んできました。この、天地創造を語る不思議な言葉は、七ページほどの小論文のなかにあります。いつもの実務的なカントとはちがう、この謎に出会ったときから、研究の方向が決まりました。関係する本が図書館にありますので、見に行きましょう。本を見ながら、私がどのように研究をしているのか、お話ししてみたいと思います。

1 二冊の本を手取る

ここは紫野図書館の地下二階C層、洋書場所です。この高いところに、史上最大の天文学者の一人、ケプラーの全集があります。一冊、手に取ってみましょう。一六〇四年の『天文学の視覚論』です。妙な題ですね。ケプラーは天体観測にともなう誤差の処理には、視覚の仕組みを知ることが欠かせないと考えました。そして、網膜に外界が反転して映ることを幾何光学的に示すなど、近代的視覚論の先駆けにもなつたのです。後のページにはこんな図があります(図1)。よく見ると、円、楕円、放物線、そして双曲線が、

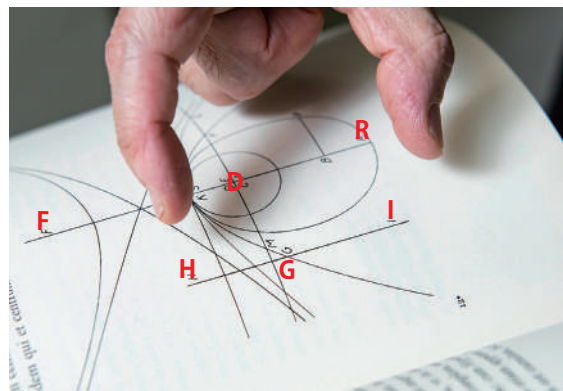


図1 J.Kepler, Astronomiae Pars Optica, p91, Gesammelte Werke, Band2, C.H.Beck'sche, Verlagsbuchhandlung,München ※判別のため、記号を朱字で表記

真ん中を通る縦軸、FRに両断されるようにして重なっています。この図には、一つの歴史的進展が描かれています。指が示している直線、HGIは、Gを放物線上に任意にとり、軸FRに平行に引いた直線です。これに注目しておいてください。



図2 『禮記』、鄭玄注、卷第二、宝暦九年版、皇都書林梓行

少し歩きましょう。五メートルほどで、江戸期漢学の書棚になります。儀礼を論ずる『禮記』のいくつかの版から二冊、見てみましょう。前漢に成立し、後漢の学者、鄭玄が注をつけたものです。このページは葬礼を多く扱う第二巻檀弓篇の一部です(図2)。この版の出版は、宝暦九年(二七五九年)で、この頃、三十代の本居宣長が松坂で医業を営みながら、『古事記伝』の基礎となる言語学を、『禮記』のこの場所など、引用しながら構想していました。



図書館を少し歩くと、こうして、時代を創つた書物と次々に出会います。そして、私には、三十になつたばかりの頃、哲学を学んでいたロンドン大学の図書館で、はじめて哲学系の書架群に足を踏み入れたときの動揺がよみがえります。

2 雑木林と水辺の木

ロンドンの図書館では、蔵書の多さは当然としても、本の種類と並び様が目を引きました。哲学だけでなく、自然科学、科学史といった異分野の本がおびただしく集まって、雑木林を思わせます。古代ギリシャから、哲学と自然科学が共にしてきた悪戦苦闘の歴史が目に見えるようです。自分が日本で学んできた哲学が、鉢植えのきれいな花を数輪、切り花にして並べたみたいに見えます。大変な所に来たと

思いました。

このまま帰るわけにもいかず、この図書館で終日過ごす日々が始まりました。図書館の隣は大英博物館、そしてそこからまっすぐ、広く賑やかな通りをチームズ川に向かって下ると、ナショナルギャラリー、これは英国最大の美術館です。二つともただなので、図書館で飽きると、ミイラや絵を見に出歩きました。数知れない絵画のなか、いつも、ピエロ・デッラ・フランチェスカのテンペラ画の前に来ました。洗礼のキリストが、空を映す浅く澄んだ水辺に立ち、その上に白い幹の木が濃い緑の葉を茂らせ、すべては新しい透視図法の秩序のなかにあります(図3)。この十五世紀の大画家ピエロは『絵画の透視図法論』(二四六〇年頃)という手稿を残しました。絵画史初の透視図指南書は、後の世に長い影響を与えることになります。これが先のケプラーと関係するのです。

私の研究室に戻って、これを見てみましょう。

3 理屈を少々

『絵画の透視図法論』にはたくさんの、精緻で美しい図版が付属します。ピエロは視覚の原理に基づきながら、画家がさまざまな対象を表現するときに役立つ基本図を描いていきます。幾何学的な透視図法が使われ、写真を見るようです。(図4) この図では、八



図3 「キリストの洗礼」『ピエロ・デッラ・フランチェスカ』SCALA/東京書籍より

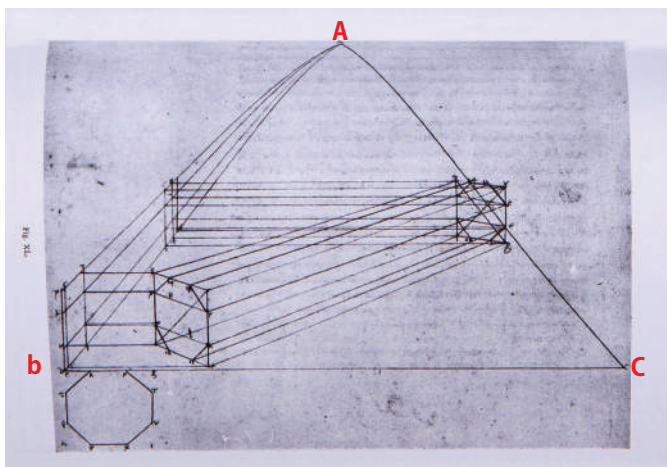


図4 De Prospectiva Pingendi, Tav. XVI, Ed.G.Nicco - Fasola, Le Lettere, Firenze,1984 ※判別のため、記号を朱字で表記

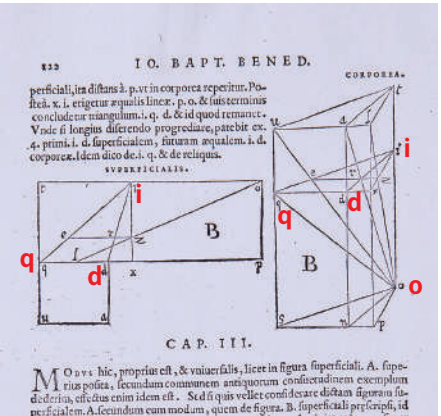


図5 G.B.Benedetti, *De Rationibus Operationum Perspectivae*, Turin, 1585, British Library, shelf mark 531, n. 14, p.122
※判別のため、記号を朱字で表記

(図5)は、イタリアの数学者、G.ベネデッティによるものです(二五八五年)。このベネデッティから透視図法は、近代、現代につながる、視点を取り込んだ幾何学に育ちます。左の平面図は透視図法、ここにも消点*i*を頂点として、平行線の交わる視覚の三角形、*i q d*が見られますね。右の立体図は、視点*o*からの視線群によって、二図の記号を対応させながら、透視図法の正しさを示すものです。

この交わる平行線が、ケプラーと関係します。ケプラーはあの図で、円、楕円、放物線、そして双曲線は、形を連続的に変化させながら、連なる図形であることを論じます。このとき、中心軸、FR上に、円の中心、楕円の二つの焦点がありますが、放物線にはDに加えて、軸上の無限に遠いところに、焦点Xを考えます。そして一点Xは、妙ですが、軸FRのF側とR側の双方の先にあるとしますのです。さらに、すべて平行線は、無限遠で交わると前提します。これで、焦点Xと点Gを結ぶ直線は直線HGIと重な

ものの形は、幾何学でも、無限の空間にそなわった「ここ」にもなつて現れるのではないか、こう、カントは考えます。そして、このような、無から形を生成する、ここからの向きの区別を「方位」と呼びます。カントは、絵画や数学が切り開いた方位への問いに、「私」「我」という哲学の問いを見出したのです。すべて空間は、まず、上下左右奥行きを表す働きであり、この働きによる方位の区別は、私のいる「ここ」なしには、あり得ないと、カントは直観しています。それで、「空間とは私の外」(「純粹理性批判」空間論)です。すると、そこに方位がある以上、宇宙の空間、数学の空間、物理学の空間、生活の空間、歴史の空間、すべてはこの私、主観が統一することになります。天地創造の空間も。カントの哲学は、この主観性を、人生のあらゆる場面に現れる、抑えがたい「我」と捉えそれを、改めて近代的な公共性のもとに制度化する試みとも考えられます。

一視点による統一の空間、『キリストの洗礼』は、それでも画中の天使にこちらを向かせ、見る人にこの洗礼の儀式に加わるよう、呼びかけます。一方、カントは、公共性を論じながら、儀礼や言語を語ることはありませんでした。

カントの弟子、ヘルダーは、近代言語学の基礎となった『言語起源論』(二七〇年)で、人は森の中に一人でいようと、理性で言葉を作り上げると考えて、他人を外しました。この後、哲学が改めて言葉の社会性を回復する、長い道のりが始まります。

ることになります。すると、焦点の連続した動きが、四つの形を生成していく様が見えるのです。数学はここから次第に、日常世界からするといくら奇妙でも、こうした論理的思考だけを頼りに、無限の存在を、はつきりと表現し始めます。

もし、歩いている道の両側や列車のレールを見たとき、それが遠くで交わるように見えなければ、空間の方位は分らないでしょう。透視図法では、この交わる平行線が空間に方位を与えています。一方、

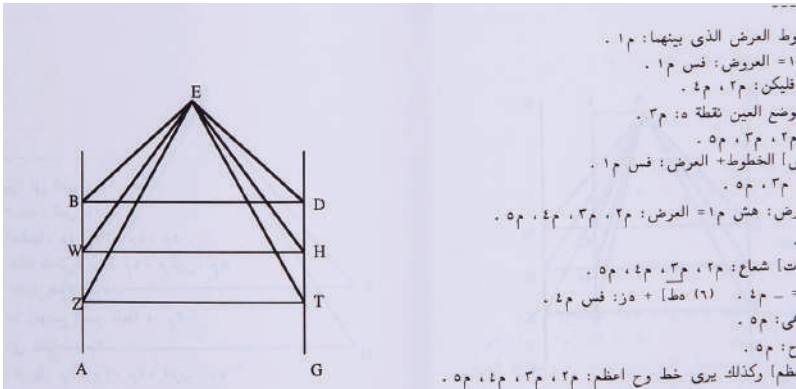


図6 E.Kheirandish, *The Arabic Version of Euclid's Optics*, vol.1, Sources in the History of Mathematics and Physical Sciences 16, p.16, Springer, 1998

5 おわりに

図書館で見た『禮記』の一節には、こうあります。「弁人有其母死而孺子泣者(言泣聲無節)。孔子曰哀則哀(此誠哀。而難為繼也(失禮中)夫禮為可傳也。為可繼也。故哭踊有節」。母親が亡くなって、子どもが泣いて悲しむ。孔子はこう言う。これは悲しいことだが、この泣きようでは、継ぐ事はできない。礼とは、他人に伝わり、人の間で継ぐことができればならない。だから、葬礼の踊りには節や拍子があるのだ。これは若い本居宣長による歌論、『排蘆小舟』の原稿です(図7 宝暦十年頃、一七六〇年)。左上端にある注にこの部分が書き写されています。ただし、ここで傍線を引いたところ、孔子が子供の泣き声は礼を欠いているとして、礼とは何かを言うところ、これを宣長はそっくり省略して、「云々」とします。そして少し後で、この孔子の言を否定します。大きな声で「ヨライヨライ」と泣くその声にも、「文」がある、つまり、この声の「節や拍子」は、その形式を通して他人へ呼びかけ、その共感を求めている。だから、泣き声も儀礼に適用と言うのです。次の歌論、『石上私淑言』(宝暦十三年頃)の「ものあはれ論」は、言語と歌の起源を語ります。「…あはれにたへずしてをのすからほころび出ることばは。必長く延て文あるもの也。これがやがて歌也」。宣長は、呼吸のリズムからくる発声の文に、歌や言語の起源と、その根源的な儀礼性を見て取ります。

無限の数学的表現としての交わる平行線も、方位空間を作ることになり、この方位はものの形の生成に統一を与えます。

この図は、紀元前三百年頃のユークリッド『視覚論』(図6)です。Eは視点で、BDが対象、EB、EW等は対象への視線。同じ長さの対象は、視点から離れるにしたがつて、短く見えることを示しています。幾何学と視覚論、その結びつきに、どれほど長い歴史があるかがよく分かります。日本ではほとんど知られていない『視覚論』は、西洋社会に深く長い影響を及ぼしました。ピエロの透視図法の基礎はこの『視覚論』です。ところで、この右頁にアラビア語が見てとれます。この著作は、長い間、様々な形で、ギリシャ語からアラビア語に翻訳され、アラビア文化圏で洗練されました。ケプラーはアラビア科学の視覚論を継いだのです。

4 カントの出自

最初に見たカントの言葉は「空間における方位の区別」の第一根拠について(二七六八年)にあります。こうして、カントは、古代ギリシャの視覚論からルネサンス絵画、そして空間を問う数学、この思索の流れにいます。カントは、もともと身近なもの、右手、左手を問います。右手か左手か、どちらかがまず、天地創造で現れたとする。その「向き」によってだけ、どちらか分かるが、比較する相手もない空(から)の宇宙である。が、それでも私がいる「ここ」があることで、右、左の区別がついているのではないか。すると、線や面のいろいろな向きの組み合わせ、つまり、

息をして泣くこの体と他人から、言葉の起こりを説く宣長と、空(から)の宇宙の、ただ一つの視点である私から公共性を構想するカントと、異なる伝統を負う、しかし同世代のこの議論は、社会と私が矛盾しながらも一体であるように、固くつながって見えます。研究生活を通じて、このようなつながりを、いたるところに信じるようになりました。

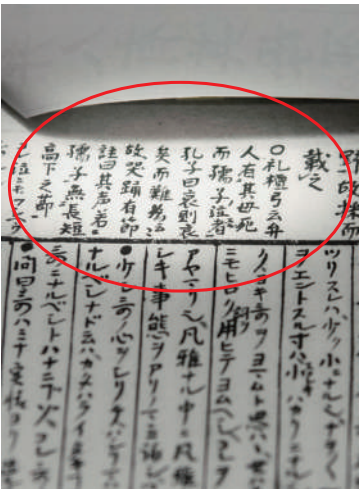


図7 排蘆小舟、本居宣長記念館蔵

たやま れいし
田山 令史
仏教学部仏教学科教授

慶應義塾大学文学研究科修士課程修了、
ロンドン大学キングスカレッジ Ph.D. (哲学)

関連する著作
「哲学のなかの仏教－法蔵の教論－」
(『日本佛教学会年報』、2000年)
「空間と時間－主観性をめぐって」
(『カント全集』別巻、岩波書店、2006年)
「連続をめぐる哲学」
(共編著、ミネルヴァ書房、2004年)
「空間と時間」
(『カントを学ぶ人のために』、世界思想社、2012年) など

縁心寺日鑑・御法事記録

梅香山縁心寺

本稿では、当館所蔵の「縁心寺日鑑」および「御法事記録」について紹介する。この二点は、一九八五年に書店より購入したものであり、もとは縁心寺という寺院で保管されていたと思われる。

縁心寺は、近江国膳所藩主本多氏の菩提寺で、膳所城下大津町（現滋賀県大津市丸の内町）に所在する浄土宗寺院である。山号は梅香山で、膳所藩儒者の寒川辰清が享保一九（七三四）年に編纂した「近江国輿地志略」によると、慶長七（一六〇二）年、当時本多氏が領有していた三河国西尾（現愛知県西尾市）に建立され、元和三（一六一七）年に本多康俊が膳所に移封となった際に、共に膳所に移されたという『大日本地誌大系三九 近江国輿地志略』雄山閣、一九七一年）。安政元（一八五四）年には失火により全焼している（大津町）『角川日本地名大辞典 二五 滋賀県』角川書店、一九七九年）。

縁心寺日鑑

江戸時代に縁心寺で作成された「日鑑」は、いわば寺務日誌のようなもので、収録内容は膳所藩主本多氏の法事に関する記事、本山知恩院との関わりを示す記事などが中心である。

当館で所蔵する「日鑑」は全七冊で、享保一七年から文化七（一八一〇）年までの記事がみられる。厚さはそれぞれ異なるが、七冊とも縦二四センチ、横一七センチ程度の大きさとなっている。

各冊の表紙には全て同一の紙が用いられ、「日鑑一」、「從享保十七壬子年至延享四丁卯年」などと、題と巻次、収録年代が記されている。裏表紙には「梅香山縁心寺」とある（第七冊のみ表紙には「日鑑」ではなく「記録」、裏表紙には「縁心寺 弁誉代」とある）。当館で所蔵する「日鑑」の巻次は「一、三、五、六、七、八、一であり、二、四、九、一〇の四冊が欠けている。なお、当館で所蔵するものの他に、縁心寺にも安政

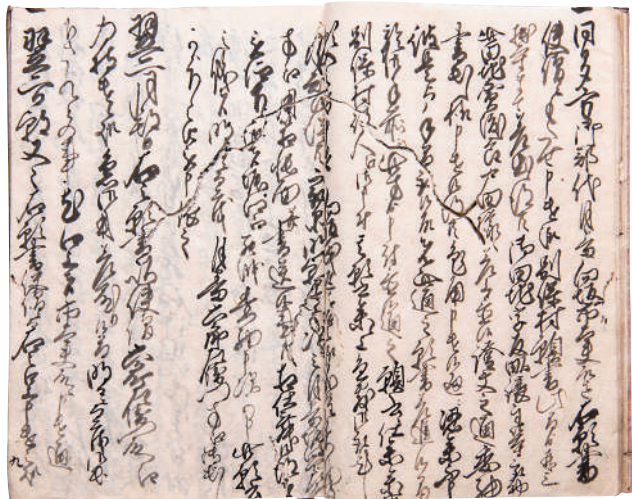
に付与された巻次と当館所蔵本の冊次が異なるため、以降「日鑑三」^{（冊次）}（第二冊）などと表記する。

各冊の巻頭には目次がある。この目次は、「日鑑」が記録された当時に作成されたものではなく、寛政一二（一七九九）年に作成されたものと推測される。というのも、「日鑑一」（第一冊）の寛政一二年の年記のある奥書に、弁誉という人物が享保一七年から寛政一〇年に至る「九巻之記録」を整理し、目次を作成したことが記されているのである。なお、寛政一二年より後に作成された「日鑑十一」（第七冊）や「日記」にも他の巻と同様目次がある。

目次を作成した弁誉は、当館所蔵の「公儀御大法書」という資料の奥書「寛政十年十月 本山黒谷役者 弁登霊感所持」の「弁誉」と同一人物であると考えられる。

「公儀御大法書」は、一九八五年に「日鑑」と共に当館で受け入れた資料で、いわゆる「公事方御定書」の内容を再構成した法令集の写本である。この資料ももとは縁心寺で保管されていたと思われる。内容面では「日鑑」に関わるものではないが、「公儀御大法書」の表紙にも「日鑑」と同じ紙が用いられていることから、「日鑑」と「公儀御大法書」は、同時期に弁誉により整理されたのではないかと推測される。

「日鑑」の形態上の特徴としてもう一点指摘できるのが、冊子の天地が切り取られ、文字の一部が欠けている巻がある点である。この特徴は、一（第一冊）、三（第二冊）、七（第五冊）にみられる。これはおそらく、「日鑑」の目次や表紙を整備して管理するにあたり、不揃いであった冊子の大きさを揃えたということであろう。



縁心寺日鑑 三（第2冊） 冊子の天地が切られ、文字の一部が欠けている

「日鑑」の収録記事

「日鑑」には具体的にはどのような記事が掲載されているのだろうか。実際の「日鑑」の記事の内容に触れる前に、膳所藩と縁心寺の関係について確認しておこう。

旧膳所藩士の平田好が著した『懐郷坐談』（平田好、一九〇八年）は、藩主本多氏の家系や膳所藩の職制、近江国膳所藩領内の古跡・寺社、城内の年中行事などをまとめた著作だが、その城内年中行事の中には、本多氏の菩提寺である縁心寺がたびたび現れる。年中行事の中で縁心寺に言及がある場合は、霊照院と



縁心寺日鑑

元年から四年の記事のある「隆徳院様御中陰記并日記」が残っている（大津市歴史博物館寄託、以降「日記」と表記する）。この「日記」の表紙には巻次が記されていないが、小口に「十七」とある。「日鑑」及び「日記」、さらに後述する「御法事記録」の巻次と各冊の収録年代は別表のとおりである。なお、現物

共に名前が挙がるが多く、この二寺は本多氏にとって特に重要な位置にあったと考えられる。霊照院は、膳所城下の天台宗寺院で、徳川氏歴代の位牌を安置していた。

また『伊奈城と膳所城』（旧膳所藩祖三百五十年祭典大記念会、一九一四年）によると、膳所城下の「十ヶ寺」は「藩主の優待を受」けていたという。その具体的な内容として、「住職継目の時には、藩主より辞令を賜はり、年首には賀正として登城し、祝酒を賜ふ。藩主江戸参勤には、送迎に参加し、其他吉凶大礼には、必登城して慶弔するの光榮を有す」とある。縁心寺もこの「十ヶ寺」のうちの一つであった。

このように縁心寺は藩や本多氏の行事と関わる機会が多く、「日鑑」にもこのような行事についての記事が多く見られる。

「日鑑一」（第二冊）には「御参府二付御仏参一件」（享保一七年）という項がある。これは藩主が参勤交代のため江戸に赴く前に、縁心寺に詣でた際の記事である。この記事では、藩主は六月三日に江戸へ出発する予定であること、六月一日に縁心寺に参詣があったこと、求肥を進上したこと、藩主の出発に際しては使僧を遣わしたこと、江戸にて将軍への御目見が済んだという知らせを受け、藩主へ御機嫌伺の書状を出したことなどが記されている。菩提寺としての本多氏との関わりや、「十ヶ寺」としての藩主との関りの具体例が窺えるのである。

また、本山の知恩院との関係を示す記事も見られる。「日鑑五」（第三冊）の明和三（一七六六）年二月二五日の記事では、知恩院の住職が京都から江戸に向かい、大津や膳所を通行する際、徳性院（前膳

所藩主・本多康政）の位牌前で焼香するために縁心寺に立ち寄った事が記されている。

文化八（一八一）年の圓光大師（法然上人）六〇〇回御忌に際しては、前年の九月に法要を行ったり、檀家や末寺から報謝金を集めて知恩院に納めるなどしている。

さらに、「日鑑」には塔頭や末寺からの様々な届出を藩や知恩院に対して取り次いだ際の記事が残っている。

例えば、「日鑑五」（第三冊）の明和二年一月には、新福寺（近江国栗太郡大萱新田村）の新住職の身元を保証する証文を藩の奉行所に提出したという記事がある。

また、「日鑑三」（第二冊）の宝暦八（一七五八）年九月には、長期間無住（住職がない状態）である西方寺（近江国栗太郡里村）の檀家が知恩院に住職の任命を願い出る際の添状を、縁心寺が準備したことが記されている。この西方寺の住職に関する記事は、知恩院の日々の出来事を記した「知恩院日鑑」にも残っている（『知恩院史料集 日鑑篇一七七』総本山知恩院史料編纂所、二〇二年）が、「縁心寺日鑑」には実際にやりとりされた書状の控などもあり、内容が充実している。

「御法事記録」の概要

「日鑑」と共に当館に受け入れた「御法事記録」は、その名のとおり縁心寺において行われた法事についての記録である。安政五から文久元（一八六）年の膳所藩主本多氏の法事を詳細に記録する。「日鑑」、

- ・判読できない文字は□とした。
- ・適宜読点や並列点を補った。
- ・改行箇所は原文とは一致しない。

第三番

- 一 江州志賀郡膳所梅香山専光院 元禄九年丙子七月廿五日院号相濟 尤御使者水元团右門
- 縁心寺浄土宗知恩院嫡末寺
- 一 慶長七壬寅年於三州西尾本多縫助康俊侯 梅香院殿 御建立、開山源蓮社洪誉上人 宥信隆恕和尚、姓氏生国剃髪等之師不知、学問檀林鎌倉光明寺、附法之師不知、当寺住職十三ヶ年慶長十九甲寅年四月廿八日寂、此時号新寺
- 一本尊 立像長三尺 春日作
- 一 方丈仏 立像長一尺八寸
- 一 寛永十三丙子年、勢州龜山江有御国替、寺領七拾石拾人扶持被下置
- 一 慶安四辛卯年膳所江御国替之後、浄有様寺領御加増百五拾石拾人扶持被下置、本誉上人代

- 一 境内 東西廿八間 南北五十三間 平地從往古除地
- 一本堂 九間 拾間
- 一 庫裏 四間 六間
- 一本堂の庫裏江之廊下 五間 式間半
- 一方丈 三間 十間
- 一 居間 三間 五間
- 一 書院 三間 五間

「公儀御大法書」とは作成年に隔たりがあり、表紙に用いられている紙もこれらの資料とは異なる。表紙には巻次が記されていないが、小口には「御法事記十四」とあり、同じような記録が三冊存在していた可能性がある。全八〇丁あり、そのうち五二丁は、安政五年の令徳院（前藩主・本多康融）中陰から百ヶ日までの記録である。

令徳院の法事の記録は、法事を行うにあつての準備、藩や他寺院との書状のやりとり、当日の儀式の次第など、詳しく記述されている。「日鑑」にも法事の記録はあるが、儀式の次第まで記されることは少なく、「御法事記録」でのみ得られる情報も多いと思われる。

おわりに

「日鑑」や「御法事記録」はあくまで縁心寺内の寺務・行事のためにまとめられたものであつて、膳所藩の宗教政策や年中行事の全容がこれらの資料によって



左から、「縁心寺日鑑」、「公儀御大法書」、「御法事記録」

判明する訳ではない。しかし民政を担う部署の記録である「郡方日記」以外にまとまった資料がほとんど残っていない膳所藩において、寺院をめぐる藩の動きや、本多氏と菩提寺の関係の一端が見えるという点で貴重な資料であるといえよう。

さらに、対知恩院や膳所藩領内の寺院の記事からは、「知恩院日鑑」といった大寺院の資料だけでは知りえなかった膳所藩領内寺院の状況が窺える。今後、「膳所藩郡方日記」や「知恩院日鑑」などの関連資料とあわせて分析を進めていくことで、膳所の地域史、藩政史、浄土宗史などの多くの成果が得られるだろう。

史料翻刻

ここには、「日鑑十二」（第七冊）の文化七年の記事より、縁心寺及びその塔頭、末寺の由緒についてまとめられた記事を翻刻した。記事の末尾に年号が入っている記事もあるが、これらはすべて文化七年に書写されたものである。

塔頭・末寺についての記事は元禄・享保年間に浄土宗寺院の沿革をまとめた「蓮門精舎旧詞」（『浄土宗全書』続第一八巻、浄土宗開宗八百周年記念慶讃準備局、一九七三年）と重複する記述が多いが、「日鑑」でのみ見られる情報もあるため、重複部分も含めてここに掲載した。史料翻刻に際しては、次の方針に従った。

- ・旧字体や変体仮名は通行字体に改めた。ただし、「江」、「与」、「而」、「者」、「茂」や、「*る*」は原文のままとした。

一 末寺江州栗太郡勢多庄新浜村高声寺

於三州西尾慶長年中本多縫殿助殿康俊公御家来那和九郎右衛門建立、開山金蓮社台誉林山和尚、姓氏生国剃髪并学問檀林附法之師不知、寛永十五戊寅年十二月一日九十三歳寂

一 院号山号往古^る無之^二付、享和二戌年正月遍照山念仏院等響誉上人代許容、委ハ如記録

一 末寺江州栗太郡田上今村高岸寺
承応二癸巳年中建立開山心蓮社三誉船超和尚、姓氏生国剃髪等之師学問檀林不知、住職六年寛文元辛丑年八月二日田上於枝村安樂寺寂
右本末等之建立由緒之儀ハ、元禄九丙子年六月十五日之書上ケ之中^る写ス

一 末寺江州栗本郡大萱新田村新福寺之由緒者、享保十七壬子年記録第十五番委記有之^二付此二不記

第四番

一 当院一代書記被置候写左^二之通
権現様御位牌者昔美濃之御城主之御先祖正眼院殿御位牌堂建立被成安置当寺被成候、依之其堂権現と申候、其堂の瓦之紋九曜也、次二大猷院^{（徳光）}・台徳院様御位牌、同く此堂安置被成候、然^二嚴有院様権現行之節、御位牌靈照院江御立被□□、此時分大猷院様御位牌も靈照院江御遷座被成候様二覚申候、此節貞愚代是迄ハ御仏殿ヲ権現堂と称へ□□^{（由明）}靈照院へ御遷座已後御位牌堂を御仏殿と申候、右之通書記有之^二付写置者也

【別表】 縁心寺日鑑一覽

	和曆	西曆	記事数
日鑑1(第1冊)	享保17	1732	16
	享保18	1733	8
	享保19	1734	6
	享保20	1735	2
	元文1	1736	—
	元文2	1737	—
	元文3	1738	1
	元文4	1739	—
	元文5	1740	2
	寛保1	1741	—
	寛保2	1742	—
	寛保3	1743	3
	延享1	1744	—
	延享2	1745	3
	延享3	1746	—
	延享4	1747	6
欠	寛延1	1748	—
	寛延2	1749	—
	寛延3	1750	—
	宝暦1	1751	—
	宝暦2	1752	—
	宝暦3	1753	—
	宝暦4	1754	—
	宝暦5	1755	—
	宝暦6	1756	—
日鑑3(第2冊)	宝暦7	1757	15
	宝暦8	1758	22
欠	宝暦9	1759	—
	宝暦10	1760	—
	宝暦11	1761	—
	宝暦12	1762	—
	宝暦13	1763	—
	明和1	1764	—
日鑑5(第3冊)	明和2	1765	22
	明和3	1766	15
日鑑6(第4冊)	明和4	1767	24
	明和5	1768	32
日鑑7(第5冊)	明和6	1769	49
日鑑8(第6冊)	明和7	1770	13
	明和8	1771	2
	安永1	1772	—
	安永2	1773	10
	安永3	1774	4
	安永4	1775	1
	安永5	1776	2
	安永6	1777	—
	安永7	1778	1
	安永8	1779	2
	安永9	1780	1
	天明1	1781	3
	天明2	1782	1

	和暦	西暦	記事数
欠	天明3	1783	—
	天明4	1784	—
	天明5	1785	—
	天明6	1786	—
	天明7	1787	—
	天明8	1788	—
	寛政1	1789	—
	寛政2	1790	—
	寛政3	1791	—
	寛政4	1792	—
	寛政5	1793	—
	寛政6	1794	—
	寛政7	1795	—
	寛政8	1796	—
	寛政9	1797	—
	寛政10	1798	—
	寛政11	1799	—
	寛政12	1800	—
	享和1	1801	—
	享和2	1802	—
	享和3	1803	—
	文化1	1804	—
文化2	1805	—	
日鑑11(第7冊)	文化3	1806	11
	文化4	1807	5
	文化5	1808	12
	文化6	1809	14
	文化7	1810	18

日記(17) (縁心寺所蔵)	安政1	1854	1
	安政2	1855	1
	安政3	1856	10
	安政4	1857	11
御法事記録(14)	安政5	1858	3
	安政6	1859	3
	万延1	1860	2
	文久1	1861	3

土式番	
惣本山知恩院嫡末寺 江州志賀郡膳所 梅香山縁心寺 遍譽印	塔頭無御座候 末寺無御座候 一境内 貳百四十四坪 一入末 万治三子年 江州栗太郡今村 高岸寺 光譽
塔頭老軒 末寺五ヶ寺 触下貳ヶ寺	塔頭無御座候 末寺無御座候 一境内 三拾坪 一入末 不知 右之通触下末寺等迄逐吟味候処、相違無御座候 延享三寅年三月 知恩院嫡末寺 縁心寺 編譽
一境内 千五百五拾壹坪 城主本多主膳正 領主除地	一境内 六拾坪 年貢地 本多主膳正
一入末 慶長七寅年 知恩孫末寺五ヶ寺 江州志賀郡膳所 今井山兼平寺 判譽印	一入末 承応三年午 江州栗本郡新田村 新福寺 察譽
塔頭無御座候 末寺無御座候	塔頭無御座候 末寺無御座候 年貢地 城主本多主膳正
一境内 貳百貳十五坪 城主本多主膳正 領主除地	一境内 百五拾貳坪 一入末 元禄元辰年 年貢地 城主本多主膳正
一入末 寛文七未年 勢州鈴鹿郡住山村 徳本山太巖寺 舌譽印	知恩院嫡末寺 江州栗太郡里村 福寿山西方寺 唯譽
塔頭無御座候 末寺無御座候	塔頭無御座候 末寺無御座候 領主除地
一境内 九百坪年貢地 石川主殿正 一入末 慶安貳丑年 江州栗太郡新浜村 高声寺 似譽印	一境内 九百八十七坪 本多主膳正 一入末 不知

「佛敎大学図書館デジタルコレクション」のこれまでとこれから

図書館専員 飯野 勝則

1. はじめに

佛敎大学図書館では、2019年8月にデジタルアーカイブである「佛敎大学図書館デジタルコレクション」をリニューアルし、最新のデジタル技術やオープンアクセスの考え方を反映したサイトとしてリリースした。本稿では、佛敎大学図書館におけるデジタルアーカイブの歴史を振り返りつつ、今回のリニューアルのコンセプトについて、述べていきたいと思います。

2. 黎明期

佛敎大学図書館で、貴重書をウェブサイト上で公開しようという試みは、「電子展示」という名称で、江戸期の彩色木版画である『都名所百景』の画像を閲覧できるようにしたことにさかのぼる。残念ながら正確な開始時期はわからないが、遅くとも2003年8月には、ウェブサイト上で誰もがアクセスできる状態で「展示」されていた記録が残っている。とはいえ、「電子展示」においては、書誌情報は付与されておらず、また低精細な画像であっ



3. 初代のデジタルコレクション

その後、この『浄土教報』を核とした「佛敎大学図書館電子資料庫」は、『12月(つき) あそび』『大江山奇譚』『羅生門』という、佛敎大学図書館の貴重書3点(5軸)を学外向けに公開するなどのことで、さらに知名度を高めることとなった。しかし、公開から約3〜4年を経るにつれ、サイト設計が当時主流となりつつあったウェブ技術を反映していないなどの問題点が徐々に指摘されるようになり、抜本的なリニューアルが必要であると考えられるようになった。

こうして全面的な再設計・構築作業の末、2012年6月に誕生したデジタルアーカイブが「佛敎大学図書館デジタルコレクション」であった。



初代のサイトから自由に拡大・縮小できる高精細画像を公開

とはいえ、デジタルアーカイブとして公開されたコンテンツは『洛中洛外図屏風』のみにとどまるものではなかった。『12月あそび』『大江山奇譚』『羅生門』はもちろんのこと、『法然上人形状絵図』など浄土宗にかかわる貴重書をも豊富に含んだ、計160点、画像数7,200枚のコレクションが、学外からアクセスできるようになっていた。学内限定コレクションの『浄土教報』の存在も従前どおりである。それゆえ時間の経過と共に、『洛中洛外図

たこともあり、学術的な用途で利用できる水準のデジタルアーカイブとはいいがたい存在であった。

それゆえ佛敎大学図書館で、最初の「本格的」なデジタルアーカイブが公開されたのは、「佛敎大学図書館電子資料庫」という名称で、『浄土教報』のウェブデータベースをリリースした、2007年であると考えるのが適切であろう。というのも、このウェブデータベースは、それまでの「電子展示」とは異なるコンセプトを有するコンテンツとなっており、研究を目的としての利用に十分に耐えうる設計となっていたからである。例えば、1889年の創刊から、1944年の終刊に至るまでの全ての記事タイトルをテキスト化したことで、目的の記事をワンクリックで検索できるようになったほか、ブラウザの標準的な機能だけで拡大、縮小が自由に行える精細な画像が用意されたことは、研究者の利便性を著しく高めることとなった。『浄土教報』は、あくまでも学内向けとして公開したコンテンツであったが、他大学の学生や、学外の機関に属する研究者が、本学を訪問してまで利用するといった事例が相次ぐようになったのも、こういったコンセプトが評価されたことに由来するだろう。

『屏風』以外のコンテンツ画像について、マスコミからの利用申請が増加してきたことは、図書館にとって、さほど意外なことではなかった。

一方で、「佛敎大学デジタルコレクション」がもたらした影響の中には、図書館を驚かせるような事象も含まれていた。それは、このデジタルアーカイブを構築した佛敎大学図書館における人的体制と利用技術が、思った以上に世間の耳目を集めたことである。

例えば、2012年7月には、国立国会図書館から上記の内容をテーマとして、記事の執筆を依頼された。すなわち、「カレントアウェアネス」に掲載された『佛敎大学図書館デジタルコレクション』の設計とデザイン」と題された記事がそれである。本記事においては、「佛敎大学図書館デジタルコレクション」の設計・構築が全て図書館内部で行われており、外部の業者はかかわっていないことや、構築に当たって利用した技術は、その全てがオープンソースとして無償で提供されているソフトウェア等によって実現することなどについて言及したのだが、大学や図書館のみならず、幅広い層から反響があり、いわゆるウェブ業界からの耳目を集めることになった。その結果、ウェブサイトのデザイン専門誌である「Web Designing」の2012年9月号では、特集の一部として「佛敎大学図書館デジタルコレクション」を取り上げられ、一般のウェブ系雑誌に図書館のデジタルアーカイブが掲載されるという、異例の状況となった。これもひとえに、「佛敎大学図書館デジタルコレクション」が、当時最先端の技術をふんだんに用いた、質の高いデジタルアーカイ

い、貴重書そのものの持つ魅力を再発見するような機能をリリースしている。そのひとつが「マッピング」である。これは貴重書の各作品中に現れる名所を切り取り、現在の地図の上に場所を示す形で配置したもので、これにより、現在の姿と過去の姿について、図3のように位置情報を踏まえた上で比較することができるようになっている。街頭からスマートフォンでアクセスすることで、名所の変遷が、時間軸を踏まえつつ可視化できなど、その楽しみは尽きない。貴重書に対する新たな魅力を発見するきっかけをもたらす事ができるのではないかと考えている。

また初代の公開以来、「佛教大学図書館デジタルコレクション」に収録されている貴重書は、博物館や美術館における貸出展示（出陳）や、テレビ番組での利用など、学外での利用が盛んに行われて



図2

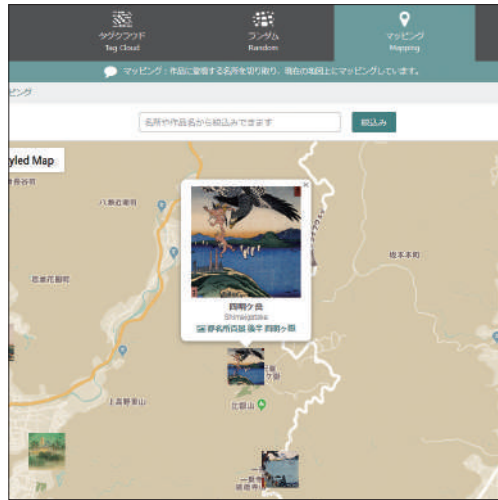


図3

きた。そこで、これらの履歴を公開することで、注目され、対象となった貴重書の魅力を再発見できるように、第2代においてはスマートフォンを用いた新たな試みを提供している。それは画像をスマートフォンで自由にダウンロードできるようにした上で、壁紙に設定できる方法を提案するというものである。図4にそのイメージを示すが、これまで貴重書にあまり関心のなかった利用者も、自身のスマートフォンと関連付けることで、興味を持ってもらうことを狙っている。

またギャラリーのように作品を鑑賞する場とし

(3) 利用者を広げる

これらリニューアルの背景にあるのは、ウェブにおけるオープンデータの流れである。さまざまな情報を利用者が自由に利用できる形で公開し、新たな活用や知見、ひいては文化を生み出しているというオープンデータの考え方は、ランガナタンの「図書館学の五法則」と親和性が高い存在でもある。第2代の「佛教大学図書館デジタルコレクション」が、そういった図書館の役割を再発見させる存在となることを願わずにはられない。

5. おわりに



図4

2019年8月、こうした考え方を受けて、「佛教大学図書館デジタルコレクション」は、第2代へとリニューアルされた。

今回のリニューアルにおいては、黎明期から受け継がれてきたデジタルアーカイブとしての考え方を引き継いだ上で、初代において課題とされてきた要素を盛り込んだ、最新の知見や技術を反映したデジタルアーカイブとなるように心がけた。コンセプトとして重視したもののひとつに、「こんなコン

4. 第2代のデジタルコレクション

テンツがあったんだ！」という驚きを利用者に与えるというものがある。佛教大学に所蔵されている、さまざまな貴重書の画像を誰も触れることができるデジタル画像として公開することは、今までも行ってきたところだが、そのデジタル画像を用いて、利用者に新たな発見をもたらそうというのである。そのために必要なコンセプトの「柱」としては、左記のような3点を設定できる。

- (1) 直感的・視覚的な見せ方
- (2) 魅力の掘り起こし
- (3) 利用者を広げる

(1) 直感的・視覚的な見せ方

一言で述べれば、専門的な知識がなくても、デジタルアーカイブの画像を理解したり、操作できるように、デジタルアーカイブのユーザーインターフェース（画面）を設計するというものである。例えば、佛教大学図書館においては、「お気軽検索」という検索システムが提供されている。このシステムにおいては、初学者であっても自らが必要とする資料を適切に見つけ出すことができるように、「ファセットナビゲーション」と呼ばれる絞り込みの仕組みなどが設定されていたり、図書の書影が提供されていたりするが、こういった視覚的に気を使ったユーザーインターフェースを実現することが、デジタ

(2) 魅力の掘り起こし

第2代においては、貴重書のデジタル画像を使うルアーカイブにおいても必要とされるのである。

図1は、第2代における作品一覧の画面である。サムネイルを表示したほか「主題」や「時代区分」などで絞り込みを行えるファセットナビゲーションを用意することで、作品が探しやすくなっていることが分かるはずである。また図2のように、アイテム（巻号）レベルにおいても、サムネイルを表示することで、自分が求める資料を直感的に探しやすい環境が構築できている。またコンテンツ画像そのものについても、初代では不可能であった「回転」や「明るさ」などの画像調整ができるようになった点も、評価できるはずである。



図1

2018年度

- 4月 学術情報検索BRDの利用説明会を開催（～2018年12月）。京都府立図書館との相互貸借の連携（本格実施）を開始。
- 4～3月 企画展示（図書館1階） 新規購入した日本および海外の絵本と、佛教大学教育後援会の援助金による語学教材を随時更新しながら展示。
- 7月 エルゼビアジャパン社による「Scopus」（2017年度新規導入）利用説明会を開催。プロクエスト社による「ReWorks」「ProQuest Central」の講習会を開催。
- 10月 紫野図書館4階に絵本コーナーを整備。
- 1月 図書館報『常照』第65号を発行。
- 1～3月 佛教大学教育後援会の援助金により「日本のことを海外で紹介できる本」をテーマとして358冊を購入。
- 3月 「本学教職員による学生にお薦めしたい本」展示（紫野図書館・二条図書室）
- 二条キャンパス図書室の情報端末機器等の更改を実施。
- 一般軽読雑誌（25タイトル）を1階新聞コーナー周辺に移設。

- 中央展示テーマ（2018年4月～2019年3月）
- 4月 新収資料展（京都編）
- 5月 法然上人絵伝
- 6月 華頂御殿勘定所文書
- 7月 祇園祭
- 8月 清代官文書
- 9月 城絵図
- 10月 丹波国桑田郡灰屋村文書
- 11月 奈良絵本
- 12月 摂津国東成郡天王寺村文書
- 1月 江戸切絵図
- 2月 梅
- 3月 新収資料展（前川五郎左衛門家文書）

2019年度

- 4月 学術情報検索BRDの利用説明会を開催（～2019年12月）。
- 4月～ 企画展示（図書館1階） 新規購入した日本および海外の絵本と、佛教大学教育後援会の援助金による「日本のことを海外で紹介できる本」を随時更新しながら展示。
- 8月 「佛教大学図書館デジタルコレクション」をリニューアル。
- 中央展示テーマ（2019年4月～9月）
- 4月 桜
- 5月 江戸時代の即位と改元
- 6月 名所図会
- 7月 名所図会
- 8月 名所図会
- 9月 月見



一般軽読雑誌（25タイトル）を1階新聞コーナー周辺に移設



「本学教職員による学生にお薦めしたい本」展示

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した1934（昭和9）年11月23日に木造2階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート3階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善激師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く帰依された篤志家土村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、1963（昭和38）年9月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、1972（昭和47）年4月には、開学60周年記念事業として地上5階地下1階建て、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、1995（平成7）年1月に着工し1997（平成9）年4月に竣工したもので

す。地上5階地下2階建て100万冊を収蔵することができます。佛教大学附属図書館の建物は、「佛教専門学校附属図書館成徳常照館之記」にある「今ココニ冠スル所ノ成徳常照館ノ名稱ハ（中略）繙書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられ、書物をひもとく者が努力して、立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この木額は佛教専門学校第7代校長江藤激英師（浄土宗大本山善導寺61世住職）によって撰述されたもので、現在は図書館1階に掲げられています。また、同じく1階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵「転輪蔵」（略して輪蔵）の縮小



2006（平成18）年12月 図書館夜景

複製は、1998（平成10）年5月、図書館開館1周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄附されました。輪蔵は、1回転させることによって、一切経を読誦したことに同じ功德を得られるといわれています。

佛教大学附属図書館報『常照』第66号をお届けします。情報化という社会の大きな構造的変化が学校現場を変えているように、図書館もどんどん進展します。このたび、ウェブにおけるオープンデータ化の流れをうけて、デジタルコレクションのリニューアルを行ないました。あらたな発見を楽しみながら、図書館をご活用ください。

後記

佛教大学附属図書館報『常照』第66号

発行日 令和元年10月23日
 発行者 佛教大学附属図書館長 松田和信
 発行所 京都市北区紫野北花ノ坊町96
 佛教大学附属図書館
 制作 株式会社栄美通信